

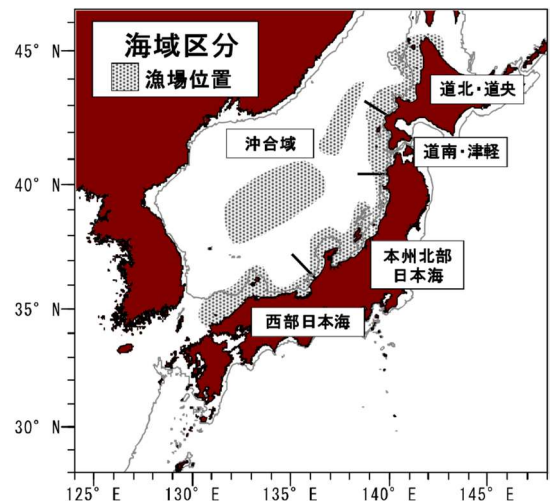
2026年7月31日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2026年度 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2026年8月～12月)のポイント

- ・ 日本海全体：来遊量は前年を下回る。
 - ・ 道北・道央海域：来遊量は前年を下回る。
 - ・ 道南・津軽海域：来遊量は前年を下回る。
 - ・ 本州北部日本海海域：来遊量は前年を下回る。
 - ・ 西部日本海海域：来遊量は前年を下回る。
 - ・ 沖合域：来遊量は前年並。
- * 道北・道央海域および道南・津軽海域は8月～9月を対象とする。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：浮魚資源部（横浜） 大島、松井
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2026年度 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2026年8月～12月）の概要

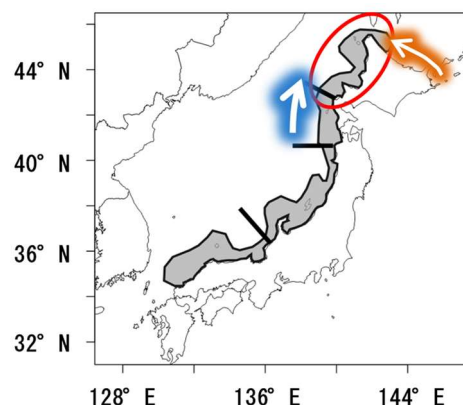
1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

（1）来遊量：1981年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、現状漁獲が無く、調査結果も不良のため、**来遊量は前年を下回ると予測される。**

（2）漁期・漁場：日本海を北上・南下する群れが漁獲対象。
太平洋から宗谷海峡を通じて来遊する群れも漁獲される。
対象期間を通じて漁場となる。



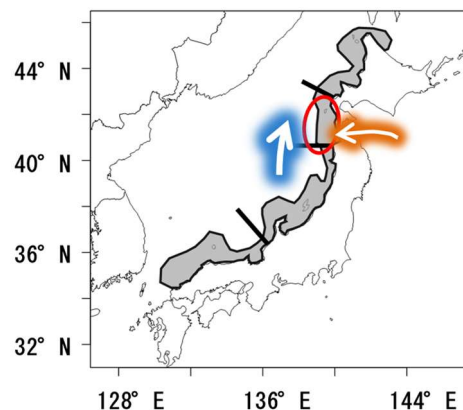
2. 道南・津軽海域（小型いか釣り）

（1）来遊量：1981年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、現状漁獲がほぼ無く、調査結果も不良のため、**来遊量は前年を下回ると予測される。**

（2）漁期・漁場：日本海を北上・南下する群れが漁獲対象。
太平洋から津軽海峡を通じて来遊する群れも漁獲される。
対象期間を通じて漁場となる。



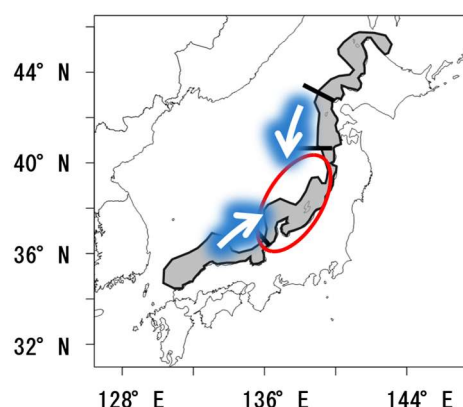
3. 本州北部日本海海域（小型いか釣り）

（1）来遊量：1981年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、調査結果が不良であり、**来遊量は前年を下回ると予測される。**

（2）漁期・漁場：日本海を北上・南下する群れが漁獲対象。
対象期間を通じて漁場となる。



4. 西部日本海海域（小型いか釣り）

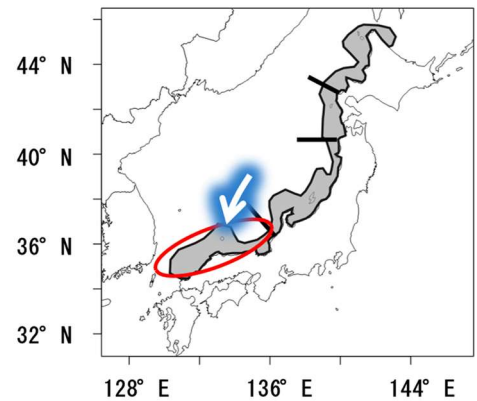
（1）来遊量：1981年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、調査結果が不良であり、来遊量は前年を下回ると予測される。

（2）漁期・漁場：日本海を南下する群れが漁獲対象。

対象期間を通じて漁場となる。



5. 沖合域（いか釣り）

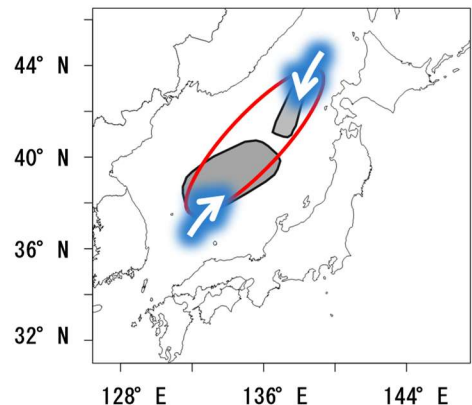
（1）来遊量：1981年以降では低水準である。

前年（2025年）は、近年5年（2020～2024年）平均を下回った。

本年（2026年）は、調査結果が不良であり、来遊量は前年並と予測される。

（2）漁期・漁場：日本海を北上・南下する群れが漁獲対象。

対象期間を通じて漁場となる。



* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 道北・道央海域および道南・津軽海域は8月～9月を対象とする。

I 予報の説明

国立研究開発法人 水産研究・教育機構（以下、水産機構）は、参画道県の試験研究機関および漁業情報サービスセンターとともに、水産庁の委託を受けてスルメイカの長期漁況予報を実施している。本資料では、日本海における8月～12月のスルメイカの来遊量予測について示した。

予測には、2026年5月下旬～7月中旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果（図1～4；以降、本調査を「いか釣り調査」と総称する）ならびに太平洋側の来遊状況（2026年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報）を用いた。さらに、4月から6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過（図5）に加え、参考情報として直近の漁況の情報および韓国における日本海側沿岸の漁況の経過を活用した。

その結果、以下の通り、道北・道央海域、道南・津軽海域、本州北部日本海海域および西部日本海海域への来遊量は前年を下回り、沖合域は前年並と予測された。

なお、前年（2025年）8月～12月の漁獲量は、道南・津軽海域ではその前年までの5年間（2020年～2024年）の平均並であり、道北・道央海域、本州北部日本海海域、西部日本海海域および沖合域は平均を下回る水準であった。

1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

本海域では例年、6月～9月には日本海を北上する群れが、それ以降は日本海を北上後に南下する群れと、太平洋から宗谷海峡を経由して来遊する群れが漁獲対象である。

いか釣り調査の結果では、道北・道央海域のCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数、スルメイカの分布密度を示す）は、漁獲がなかったため前年を下回った（図3）。また、8月～9月に本海域に来遊する群れの分布密度を示す道南・津軽海域のCPUEは前年を下回った（図3）。加えて、主要港における6月以降の水揚げは無かった。以上のことから、8月～9月の道北・道央海域への来遊量は、前年を下回ると予測される。なお、10月以降については太平洋から宗谷海峡を経由して来遊する群れが漁獲の対象に加わるが、現時点ではその来遊量に関する判断材料が揃わないため予測ができない。

2. 道南・津軽海域（小型いか釣り）

本海域では例年、6月～9月には日本海を北上する群れが、11月～12月には日本海を北上後に南下する群れと、太平洋から津軽海峡を経由して来遊する群れが漁獲対象である。

日本海を北上する群れを対象としたいか釣り調査の結果では、道南・津軽海域のCPUEは前年を下回った（図3）。また、8月～9月に本海域に来遊する群れの分布密度を示す調査海域全体のCPUEは前年を下回った（図2）。加えて、主要港における6月以降の水揚げは前年と同様にほぼ無かった。したがって、8月～9月の道南・津軽海域への来遊量は、前年を下回ると予測される。なお、前年の漁獲状況より、10月以降は太平洋から津軽海峡を経由して来遊する群れが漁獲対象に加わると考えられる（図5）。太平洋側の津軽海峡～道南太平洋海域の9月までの来遊量は前年並みと予測されているが（2026年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報より引用）、現時点では、10月以降の来遊量に関する判断材料が揃わないため予測ができない。

3. 本州北部日本海海域（小型いか釣り）

本海域では例年、5月～8月には日本海を北上する群れが、それ以降は日本海を南下する群れが漁獲の主体となる。

いか釣り調査における調査海域全体のCPUEは前年を下回った（図2）。したがって、本州北部日本海海域への来遊量は、前年を下回ると予測される。なお、本州北部日本海的主要港における5月～6月の漁獲量は前年並にみられているが、能登半島の西側に漁獲が限られており、新潟県より北側では漁獲がほとんどみられなかった。7月に入り能登半島の西側での漁獲も減少傾向にある。

4. 西部日本海海域（小型いか釣り）

本海域では、10月以降に沖合から南下する群れが漁獲の主体となる。近年は局所的に漁場が形成される場合もあるが不安定で継続しにくい。

いか釣り調査における調査海域全体のCPUEは前年を下回った（図2）。したがって、西部日本海海域への来遊量は、前年を下回ると予測される。なお、西部日本海の主要港における本年の5月～6月の漁獲量は前年を下回った。

5. 沖合域（いか釣り）

本海域では、予報期間を通じて日本海を北上する群れと南下する群れが漁獲対象である。

いか釣り調査の結果では、沖合域のCPUEは前年を上回ったものの、過去2番目に低い値であり（図3）、分布密度は極めて低い水準と考えられる。したがって、沖合域への来遊量は前年並と予測される。

II 調査・解析結果

日本海側の8道県および水産機構の調査船によるいか釣り調査（5月下旬～7月中旬に実施）により、日本海におけるスルメイカの分布状況を調べた（図1）。全54調査点のうち有漁点は24点であり（前年は全50調査点のうち有漁点は22点）、調査海域全体の有漁点割合は前年並であった（本年44%、前年44%）。調査海域全体の平均CPUEは0.20尾と前年を下回り（前年0.30尾）、過去最低であった（図2）。

海域別にみると、道北・道央海域では漁獲が無く、前年（0.21尾）を下回った（図3）。道南・津軽海域では0.002尾であり、前年（0.02尾）を下回った。本州北部日本海海域では0.16尾で、前年（0.003尾）を上回った。西部日本海海域では1.10尾であり、前年（1.99尾）を下回った。沖合域では0.13尾で、前年（0.05尾）を上回った。

漁獲されたスルメイカの外套背長組成は18cmに最頻値が見られ、前年（17cm）並であったものの、頻度分布は前年よりも外套背長の小さい個体の割合が高かった（図4）。

III 各海域の漁況の経過

2026年6月までの各海域の月別漁獲量を図5に示した。日本海沿岸各地での4月～6月の漁獲量（生鮮：速報値、一部未集計）は前年並であった（前年比81%）。海域別にみると、道北・道央ならびに道南・津軽海域は、一部暫定値であるが漁獲がほぼ無かった。本州北部日本海海域における4月～6月の漁獲量は、4月が前年を下回った（前年比73%）ものの、5月～6月は前年並であった（前年比117%）。一方、西部日本海海域における漁獲量は、4月が前年の28%、5月～6月が45%といずれも前年を下回った。

なお、大陸側の参考情報として、韓国日本海側沿岸の主要港における5月～6月のいか釣りによる漁獲量は前年の23%と前年を下回った³⁾。

³⁾ 韓国国立水産科学院による週刊海洋・漁況情報（<https://www.nifs.go.kr/board/actionBoard0014List.do>）を基に作成。

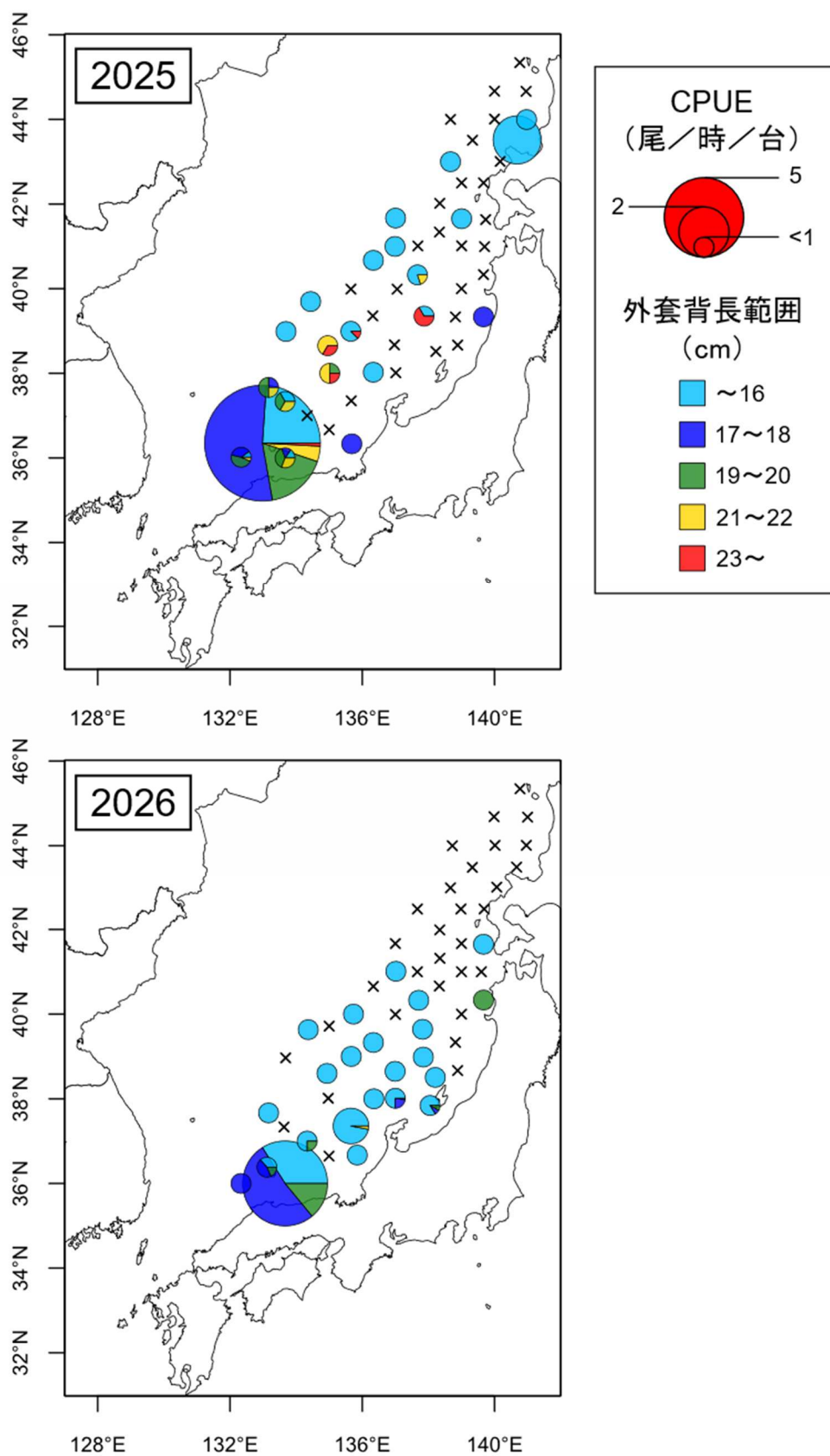


図1. 2025年、2026年のいか釣り調査におけるCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布
 図中×は漁獲無し、●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUEを示す（CPUEが1未満の点については●の面積を最小とした）。また、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す。

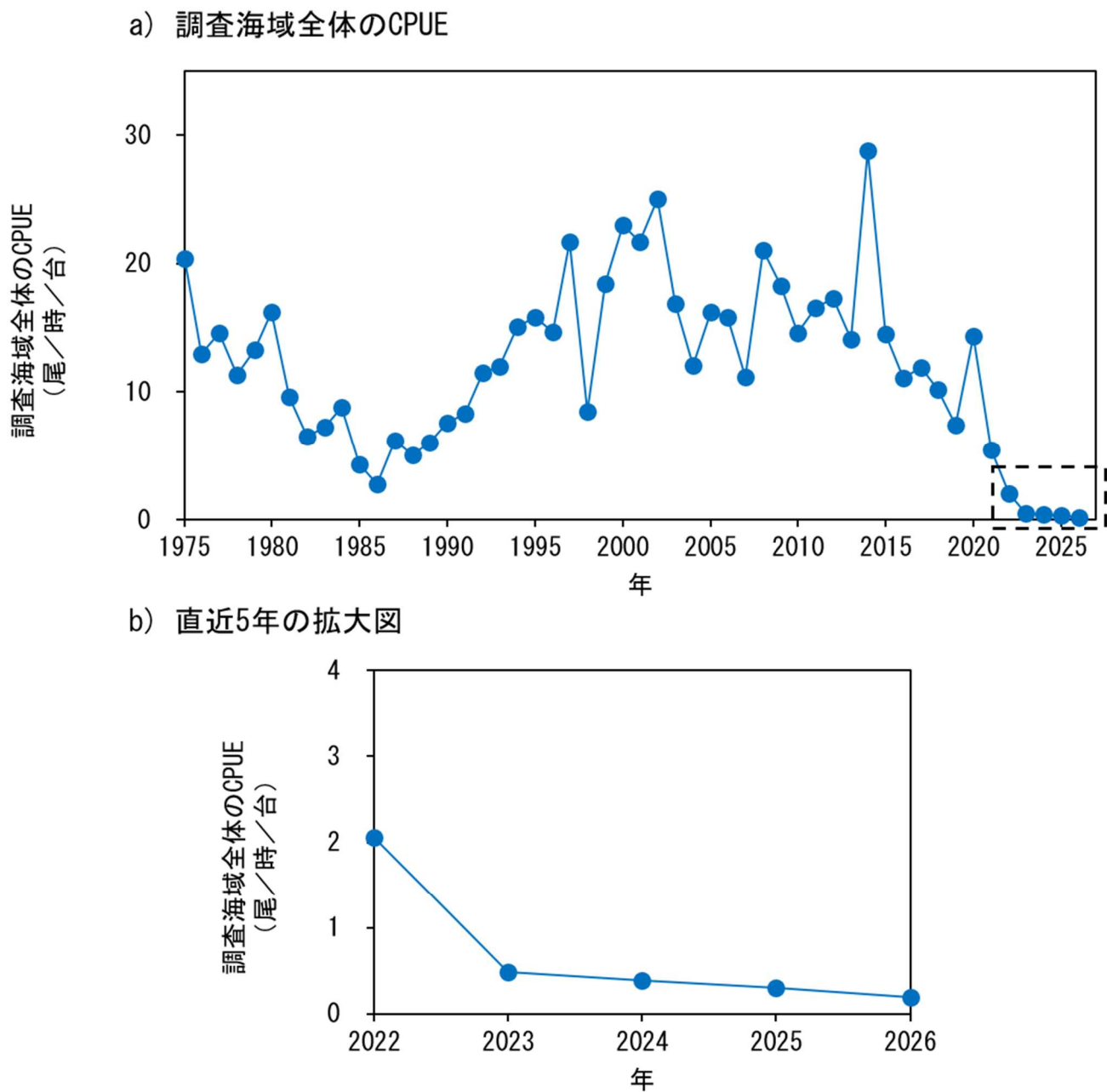
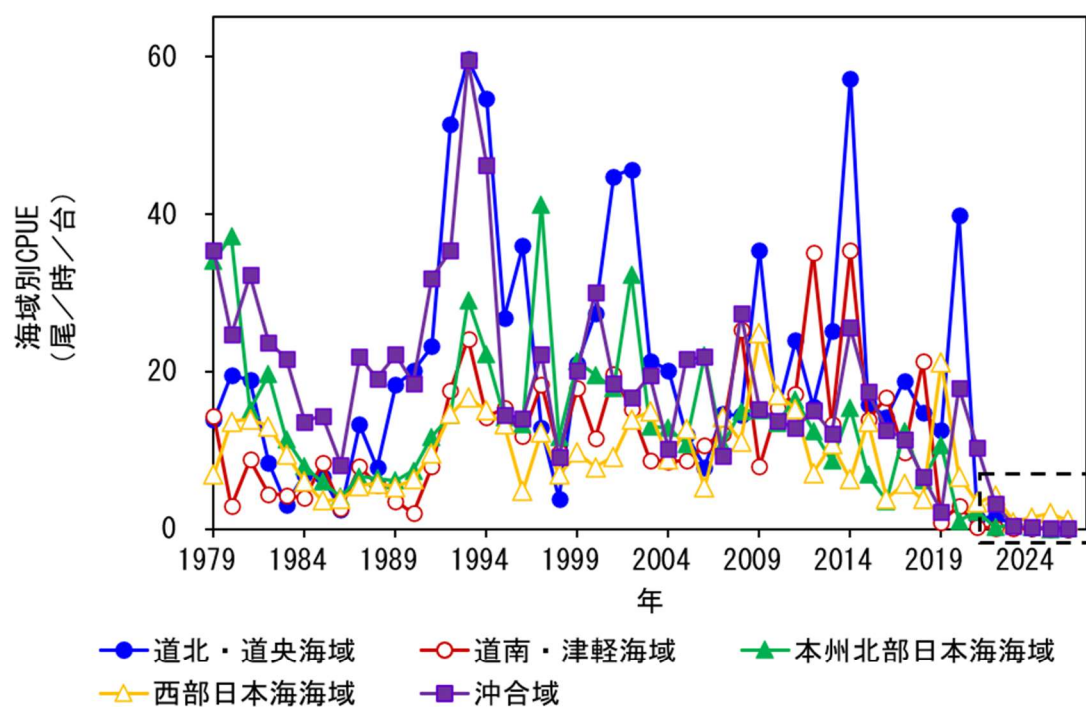


図2. 日本海におけるいか釣り調査による調査海域全体のCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の年推移
直近5年（上図aの破線で囲まれた年）を拡大したものを下図bで示した。

a) 海域別CPUE



b) 直近5年の拡大図

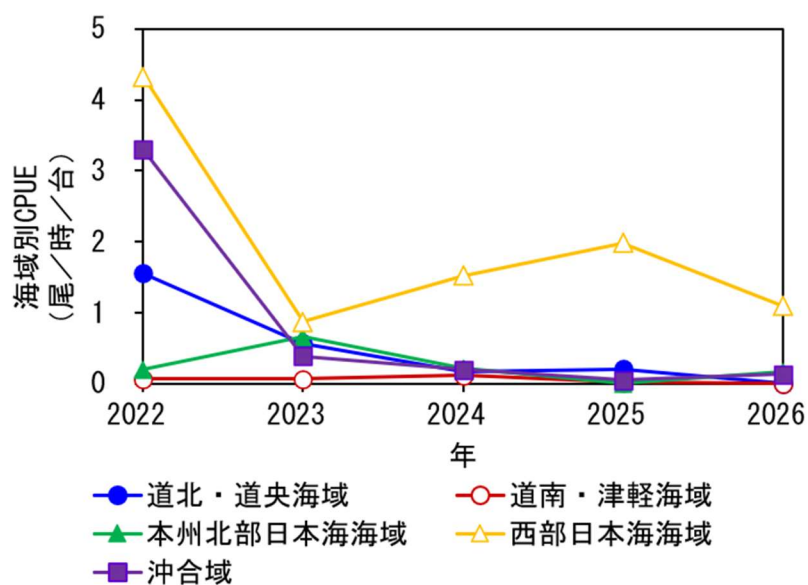


図3. 日本海におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移
直近5年（上図aの破線で囲まれた年）を拡大したものを下図bで示した。

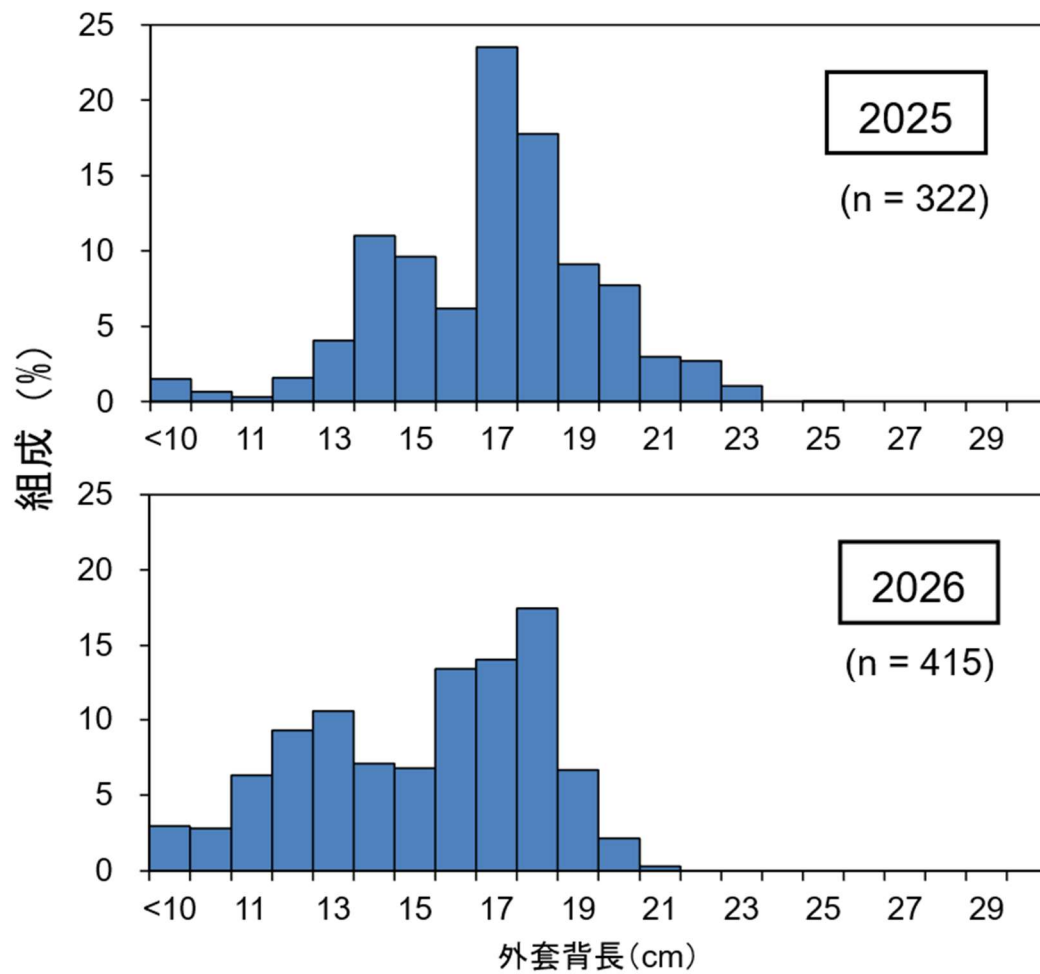


図4. 日本海におけるいか釣り調査で採集されたスルメイカの外套背長組成
各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している。
nは測定尾数を示す。

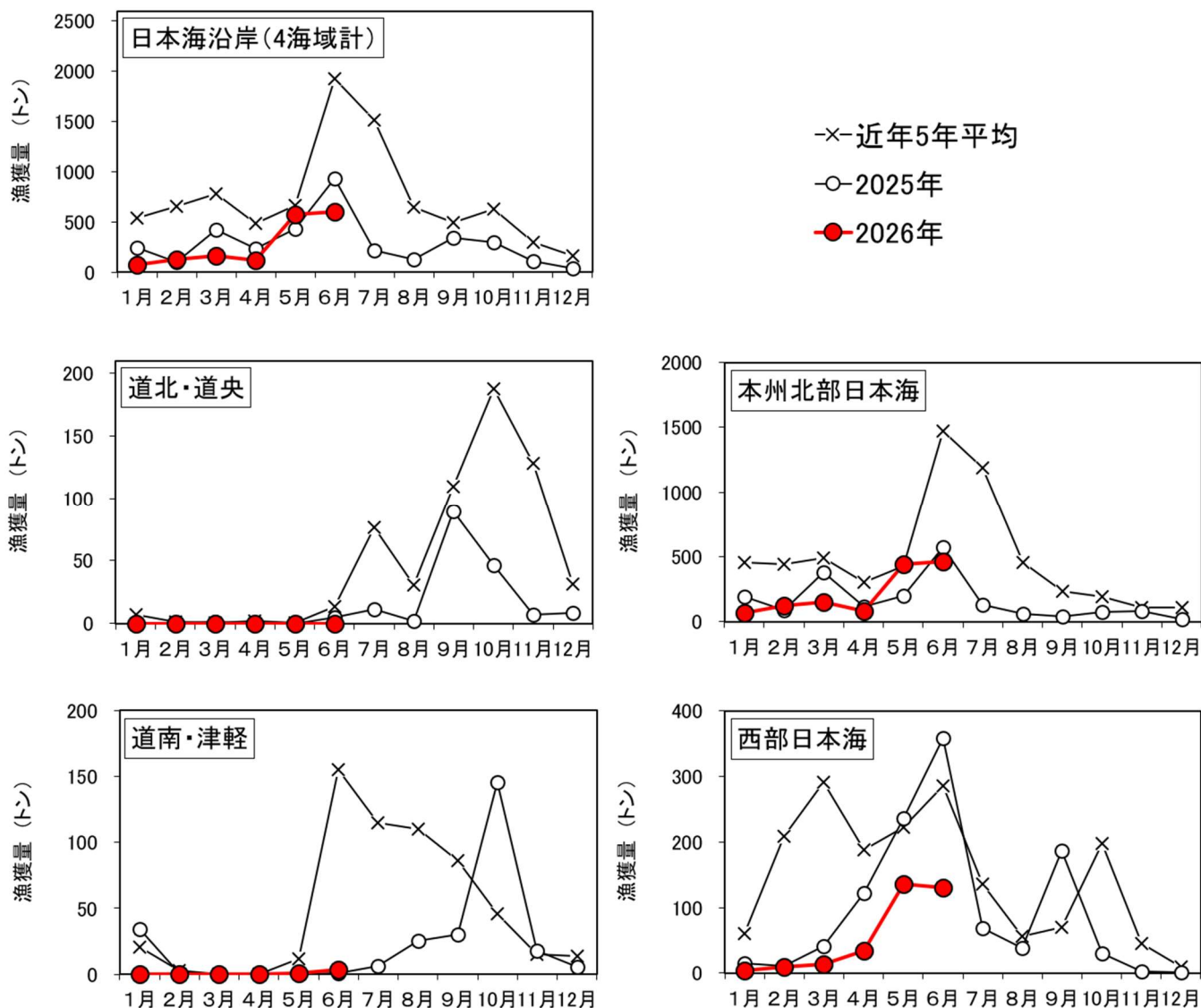


図5. 日本海沿岸（4海域計）および日本海各海域における生鮮スルメイカの主要港漁獲量の推移
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料に基づく。一部速報値を含む。
近年5年平均は2020年～2024年の平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 函館水産試験場 中央水産試験場 稚内水産試験場 地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所 秋田県水産振興センター 山形県水産技術振興センター 水産研究部 新潟県水産海洋研究所 富山県農林水産総合技術センター 水産研究所 石川県水産総合センター 福井県水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター 兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター 鳥取県水産試験場 島根県水産技術センター 山口県水産研究センター 長崎県総合水産試験場 一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
---	---